

第24回 北関東キリシタン殉教者顕彰祭

講演 「館林・邑楽地区のキリシタン遺跡」

2011年9月23日（祝）

カトリック太田教会

講師

群馬東毛地区キリシタン足跡探しの会

半澤 保（東京水産大学名誉教授）

《発表の内容》

A. 館林藩のお家事情

- ① 榊原家とキリシタン
- ② 徳川幕府の追及
- ③ 館林藩のキリシタン弾圧
- ④ 館林地区のキリシタン遺跡

B. 邑楽地区でのキリシタンの活動

- ① 「バテレン山」に教会（猿楽）設立
- ② 「バテレン山」への館林藩の急襲
- ③ 「バテレン山遺跡」からの出土品・遺址
- ④ 「バテレン山」から見える先祖の信仰

(はじめに)

注) 各画像をクリックすると大きな画像が出ます。



2011 Google

群馬県東部地域を地元では「東毛地域」と呼んでいる。邑楽地区はその中央部に位置し、西に太田市、東に館林市、そして北は渡良瀬川にそれぞれ接し、南は古利根川と云われる谷田川上流とに囲まれ、中央に多々良沼・近藤沼を擁する穀倉地帯で、米・麦を主とする純農村地帯である。奈良時代には既に藤原長柄が来て、この地方を治め整えた所でもある。今次大戦後周辺の10村落の合併により、今日の邑楽町が誕生した。

徳川時代から今日に至るまで、未だかつて邑楽町にキリシタンの日本を代表する程の歴史が秘められていた事は知られていなかった。その中心をなすものは、邑楽町篠塚地区の「バテレン山」、「バテレン塚」、「バテレン橋」等である。

以下は、この地がこの様な「キリシタンの宝庫」である事の歴史的な必然性と、それを証明する出土品や、数多くの貴重なキリシタン石仏像を紹介するものである。

A. 館林藩のお家事情

① 榊原家とキリシタン

榊原藩は徳川家康の関東入国の際、徳川四天王の一人であった**榊原康政**が、邑楽・勢多下野国梁田郡の10万石を領有して館林藩主となり始まった(1597年)。

初代館林城主の康政には正妻との間に子が無く、**側室お辻**との間の**三男康勝**が二代城主となった(1606年)。お辻は古河公方方の血筋正しい家臣の姫であるが、キリシタンであった。

その後1612年の駿府城に起こった「岡本大八事件」の折に駿府の家康の側近14人の近習が追放になったが、その中の一人の**榊原嘉平衛**は康政の兄**榊原清政**(駿河国久能城主)の子でキリシタンであったので、処分を館林藩に任せ、お預けとなった。預かった康勝は同年齢で従兄弟でもあり処分出来ず謹慎を命じたが、嘉平衛は取締りがあまいと見て、その後行方不明



となってしまった。恐らく逃亡して、邑楽村の光善寺のバテレン山に潜伏していたと思われる。

② 徳川幕府の追及

この様な時に、康勝は幕府から嘉兵衛のその後の様子を尋ねられたが、逃亡不明で返事に窮し、仕方なくバテレン山の太急襲を敢行した。この時に光善寺の老若男女赤子までが一夜こつぜん忽然と村から消えた。これは全村キリシタンの疑いで拉致連行されて、「お引廻し」、「火葬場」の地名を残している所で、太処刑、磔火刑が行われ、皆殺しになった事による。しかしここでも嘉平衛の捕縛は叶わなかった。さらに康勝は幕府の手前、実母のお辻と、筆頭側女のお松とを城沼に入水自殺したとして、処刑した。

またその後起こった大阪夏の陣では、幕府の心証を良くする為に康勝自ら戦いの先頭に立って負傷し、それがもとで27歳で死亡した(1615年)。そして館林藩三代目の城主として、康勝の実兄の大須賀忠政(遠州横須賀城主)の子息で、松平忠次を榊原に改姓して養子にし、迎えた。

結局、この時期榊原嘉平衛、お辻・お松、さらに強いて云えば館林藩二代城主も、キリシタンが原因で殉教したと云える。

③ 館林藩のキリシタン弾圧

榊原家三代藩主忠次が白河藩に転封となった(1643年)後、遠州浜松から松平乗寿が館林城主として来て、その子乗久まで17年在城したが、その後徳川三代将軍家光の四男徳川綱吉が館林城主となり、石高も25万石が増えて城下町は江戸の様に賑やかとなった。

この時代のキリシタンの弾圧は一段と激しさを増し、「農民の直訴事件」が起きている(1660年)。これはキリシタン帰農者による反乱であった。城中では牢屋敷の大増築を行なっている。

しかし1680年徳川四代将軍家綱が没するや、遺命で綱吉が五代将軍となったが、4年後の天明3年に綱吉の嗣子館林城主死去と共に、キリシタンの反乱・襲撃を恐れて城郭は大いに縮小され、綱吉時代の様な恐怖は去った。

④ 館林地区のキリシタン遺跡

この地区のキリシタン遺跡について、幾つかを以下紹介する。

イ) お辻・お松の墓(善長寺)

榊原家三代城主忠次が建立した供養墓で、石祠の屋根の妻各々に十字の印がある。そして辻には太田の西の尾島にある新田義貞の居館の地から、勾当内侍(後醍醐天皇の愛妾)の愛したツツジを一株運んで植え、松にはマツを一株供養の為に植えた(1667年)。現代の「館林のツツジ」の由来の元となっている。



ロ) 尖塔五輪塔 (善長寺)

忠次はキリシタンの話を母から得ていたと推察されるが、母の死語分骨を館林に取り寄せ、この寺に「尖塔五輪塔」を建て供養した。塔の水幹部の「来」の字は「人々よ十字架の元に来たれ」とも読める。



ハ) ストラを持つ観音墓 (源清寺)

この地区は古墳群の多い丘陵地で、キリシタンはこの古墳群の寂しい地に集まって、古墳の石窟内で秘かに祈りを捧げていたと云われている。「足下十字型の観音墓」であり、ストラが見事に肩から垂れ下がっている。戒名の「禅」に“点”が付いており、「天国で悟りを開く男子」を示している。



二) 逆手型如意輪墓 (源清寺)

逆手は“仏教に靡くのを嫌う”意で、戒名の「証」が“点付き”で、証天を示し“昇天”を意味する。



ホ) 首無し地藏尊 (龍興寺)

闇が訪れる頃に、姿が見つからぬ様そっと気配りをして民家(信徒の家)を訪ねては祈禱を捧げていたパードレ(神父)的存在の人の像である。ある時捕まって水攻めで殉教した。戒名も“拷問にも耐え、敢然と棄教する事無く天国に昇って行った”となっている。年号も「正徳二星」で“星年号”である。



B. 邑楽地区のキリシタンの活動

①「バテレン山」に教会（猿楽）設立
現地の人々の言い伝えで此の名が残っているが、「バテレン山」と云っても雑木林が千年の深さで繁っている場所で、当時この村落はすっぽり森の傘に覆われていた。

館林藩から「キリシタン」と疑われて逃げ込んだのはこの森であり、榊原嘉平衛が潜伏したのもそうであったと想像される。森の中には「猿楽」と呼ばれる

場所があり、当時行方不明になっていた水戸藩武茂領の巡回宣教師二人（または一人）によって、ここでミサが挙げられ、布教が行なわれていた事が、この地の出土品などから推察されている。こうしてカトリックの教義はバテレン山から邑楽中に浸透して行った事を証するのが、バテレン山を取り巻く神社、石仏、墓等に残るキリシタンの隠符の膨大さである。結局、「バテレン山」はこの地域のキリシタンの「聖地」で、榊原嘉平衛はその殉教者の代表と云える。



②「バテレン山」への館林藩の急襲

館林藩二代城主康勝は幕府から預かった嘉兵衛のその後の様子を尋ねられ、逃亡不明で返事に窮し、バテレン山の急襲を敢行した。この時に光善寺村の老若男女赤子までがキリシタンの疑いで拉致連行されて、「お引廻し」、「火葬場」の地名を残している所で、処刑、磔火刑が行われ、皆殺しになった。この事は当時の様子を記す某家の古文書にも示されている。

③「バテレン山」遺跡からの出土品と遺址

今大戦後、中学校新設の為にバテレン山の一部を取り壊す事になった。体育館を建てる場所には「バテレン塚」があって、そこの土に埋めてあった品が多数掘り出された。その代表的な物を次に示す。

イ) ギヤマン透明ガラス小瓶、天目茶碗類

「バテレン塚」から出土した小物類には次の様なものがある。

◇ギヤマン透明ガラス小瓶

◇中国産陶磁の青磁の大皿（口径26cm、器高さ4.8cm）

◇建蓋の天目茶碗（口径10.8cm、器高さ4.8cm）

◇伊万里の青磁の筆皿。これらは外国人使用のもの、高級武士所蔵のものと判定しうる品々であり、昭和63年11月25日邑楽町指定重要文化財となり、邑楽町教育委員会に保管されている。



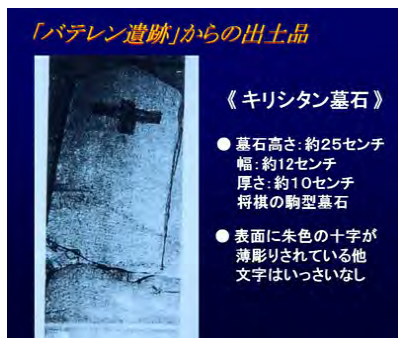
ロ) 「司祭像」(バテレン大日如来像)

写真に示す如く、像のスタイルはずんぐり太っており、胸にはハート形の連珠が懸けられ、衣服はマントの様な法衣でスータンを思わせる。どう見ても倭人とは思えない像である。台座には聖アンドレの十字が彫られている(この像は現在太田教会に保管されている)。



ハ) 十字墓、石祠類

「バテレン塚」の頂上の土中から出てきた物に、将棋の駒型をした約25cm高さの薄形墓石と完全な形の石祠と如意輪墓がある。この薄形墓石には一切の字が無いが、“十字”が浅彫りされてそこには朱がはっきりと塗られている。この十字墓は宣教師の墓か、或は榊原嘉平衛の墓らしいと云われている。また石祠には家(筒)の部分に美しくアンドレアクロス式の“クルス窓の透かし彫り”が僅かも破損せずに残っており、他の夫婦墓と思われる如意輪墓と共に製作年号がはっきりと読み取れる。



二) バテレン橋

バテレン山中「猿楽」舞台から800m程の所に「バテレン橋」がある。「猿楽」に集まる信者達が夜になると、一人二人こっそりと湿地帯の泥道を難儀しながら、細い川に架けられたこの橋を渡ったのであろう。絞り水に苦しんだキリシタン達は木を倒して橋を架けた。勿論、渡り終えたら初めのうちは引き上げて隠しておいたが、何時の頃からか橋は少しずつ大きくなり、「引き廻し」の後には架けたままになって、誰云うとなく「バテレン橋」と呼ばれる様になった。いくつかあったが大きい橋だけが残されて、全国でも珍しい「バテレン橋」と呼ばれる様になり今日に至っている。



④「バテレン山」から見える先祖の信仰

邑楽町のキリシタンの遺跡が他の地域と比較して異常に多い事から、10年来の調査結果として「この地区のキリシタンは『バテレン山』から広まった」と云う推論を示したいと思っている。そしてその中心人物として榊原嘉平衛と水戸藩武茂領から行方不明となった巡回宣教師が推察される事を示した。この地からの出土品がそれらを証明しており、そしてバテレン山を取り巻く神社、佛閣の墓石に残るキリシタンの隠符の存在にそれが見られる事を示した。

一般にキリシタン関係の文化財の物的証拠は、当時の厳しいキリシタン弾圧下の事として極秘物件として処理されてきたので、今日現存している物についての物的証拠は殆んど得られないと感じている。しかしこの地に於ける「言い伝え」、「歴史的な出土品」、「原野を含む地理的環境」が挙げられ、さらにこれらの事を必然化させた「館林藩のキリシタンにまつわるお家事情」があり、上級武士榊原嘉平衛、初代藩主の側室お辻の存在」があった。そこへ行方不明の宣教師の存在もあり、直接の証拠が得られなくとも、充分その証拠が確認出来ると思っている。



《参考資料》

- ①『関東平野の隠れキリシタン』川島恂二著 発行所：(株) さきたま出版会 (1998)
- ②『藩史大辞典』第一巻
- ③『邑楽町史』 発行者：邑楽町
- ④『あしもとに故郷』 厚川小一著 発行者：邑楽町役場企画課 (2008)